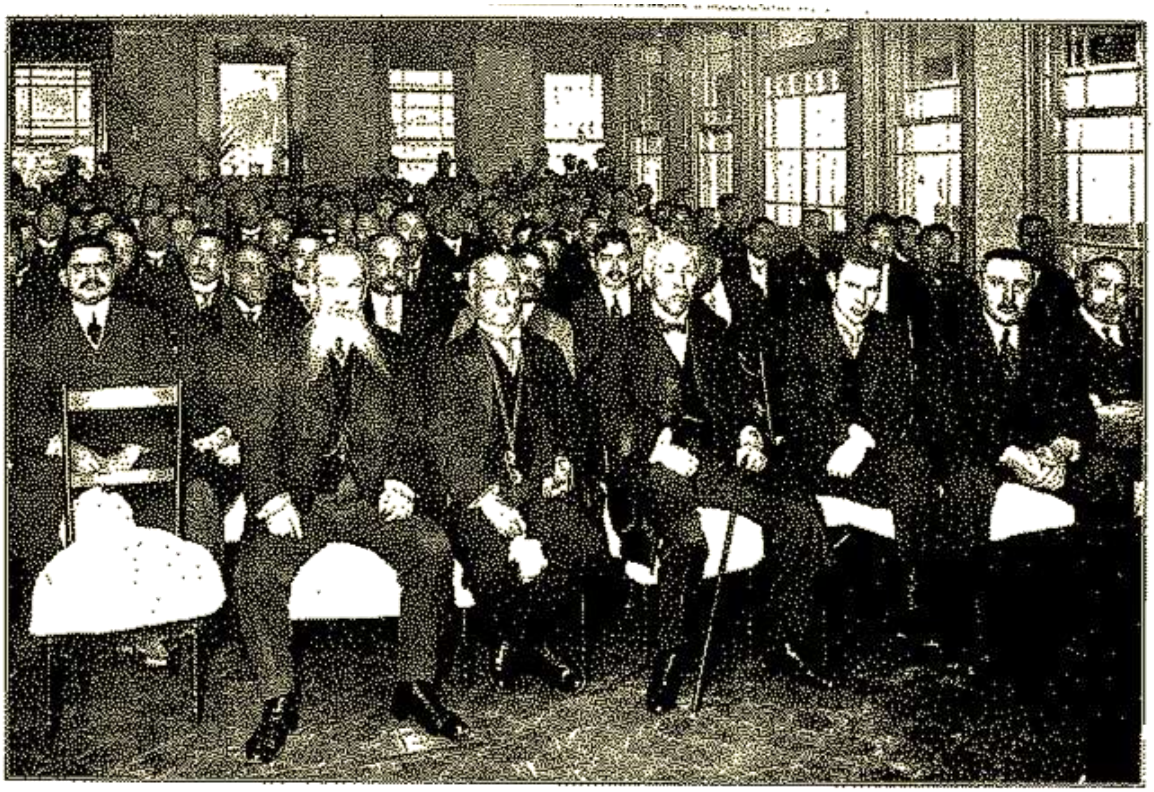
Vol. 115, No. 6 July-August 2018　　題字　一萬田 尚登 第5代日印協会会長

月刊 インド

Monthly Journal of the Japan-India Association

公益財団法人 日 印 協 会（日印間の政治・経済・文化・人的交流に貢献して 115 年）



日印協會總會
（大正五年五月十四日東京上野精養軒にて）

日印協會総會（大正 5 年 5 月 14 日）：日印協會々報 No. 16（同年 6 月 15 日）
前列中央は大隈重信、当日 英国人の孟買（ボンベイ）市長も列席。於 上野精養軒

目次

1. 2017 年度決算 評議員会・理事会 …… P. 3
2. 日印協会「機関誌」と協会の歴史―前編― …… P. 8
3. 日印友好 所縁の地　栃木県、宇都宮市とさくら市 …… p. 12
4. 菩提僊那継承事業と大安寺 …… p. 15
5. インドニュース（2018 年 6 月） …… P. 17
6. イベント紹介 …… P. 19
7. 新刊書紹介 …… P. 22
8. 掲示板 …… P. 23

1. 2017 年度決算 評議員会・理事会

The Board Meetings of the Trustees and The Directors

公益財団法人日印協会が 2017 年度（2017 年 4 月 1 日～2018 年 3 月 31 日）に実施した事業活動と決算の報告について、6 月 7 日（木）の決算理事会及び 6 月 22 日（金）の評議員会において承認されました。以下にその概略について会員の皆様にお知らせいたします。

Ⅰ．理事会

2018 年 6 月 7 日（木）15:00－16:00 に六本木の国際文化会館に於いて、18 名の理事のうち、森 喜朗会長、岡 素之副会長（住友商事）ほか 10 名ならびに監事 2 名と陪席 2 名のご出席のもと開催され、冒頭で会長の開会宣言に続き、平林 博理事長が議長に就任、議事が始まりました。

＜6 月 7 日、国際文化会館にて開催された理事会の様子

写真左上：森会長も出席＞

理事会の議案

第 1 号議案：「2017 年度事業報告（案）」の承認の件（決議事項）

第 2 号議案：「2017 年度決算報告（案）」の承認の件（決議事項）

第 3 号議案：「評議員会の招集（案）」の承認の件（決議事項）

第 4 号議案：「2018 年度役員改選の件」（評議員の改選決議事項および理事の改選報告事項）

第 5 号議案：「会員状況」の報告の件（報告事項）

第 6 号議案：「人事異動」の報告の件（報告事項）

第 7 号議案：その他

第 1 号議案一般概況を以下に全文掲載いたします。

日印両国の関係は、２０１６年に掲げた「特別戦略的グローバル・パートナーシップ」のもと、着実にその互恵関係構築が進展していると言えます。
その進展ぶりが最も現れたのは、今期における最大のイベント、２０１７年9月１３日から　１４日にかけての安倍総理訪印およびモディ首相との首脳会談ではないかと思われます。
日印共同声明において、以下に主なものを挙げます通り、かなり具体的な進展が見られます。
① わが国が進める「自由で開かれたインド太平洋戦略」とインドが進める「アクト・イースト」の更なる融合、すなわち、我が国のインド洋地域への関与、インドの東アジア・太平洋地域への関与を拡大進化させるとともに、両大洋に面したオーストラリアの関与を慫慂する。具体的には、インド国内における連結性プロジェクト（貨物新線、新幹線など）の拡大、及びアフリカを含むインド太平洋地域のその他の国と日印の連結性強化のために協働する。南アジアから東南アジアを結ぶ日印協力を推進、特にインド北東部への包括的支援のためアクト・イースト・フォーラムを設置することを表明
② 防衛・安全保障協力として、昨年７月に日印米共同訓練マラバールが実施され、相互の連携強化が表明されたが、日本の参加を恒常化する。また防衛装備協力では、陸上無人車両・ロボティクス研究協力、海難救助艇（ＵＳ－２）の調達について協議を進める
③ムンバイ・アーメダバード間高速鉄道計画（MAHSR）の起工式典が開催され、同時に最初の円借款として極めて譲許性の高い１，０００億円（金利0，1%、償還期間は据え置き期間15年を含め50年）の約束がなされた。ほかにもグジャラート州におけるシップリサイクル施設の改善に１，９００億円の円借款供与の書簡の交換が行われた
④日本語教育の拡充として、日印両国でインドの１００の高等教育機関で日本語講座開設、１，０００人の日本語教師研修の推進に取り組むことを公表した
ほかには、観光・人的交流の抜本的拡充として、日印間で空路解放などオープンスカイ合意のほか、スポーツ交流、映画交流、ビザ緩和等の推進等が確認されるなど、スローガンによるイニシアティブから、今や実行に移る段階に入ったと言ってよいでしょう。
他方ビジネス面について、今回も、日本の経団連とインド工業連盟ＣＩＩが参加したビジネス・リーダーズ・フォーラム及びＪＥＴＲＯ主催のインド経済フォーラムなど、両首相を招いての交歓の場が行われました。
また日印共同声明では、スズキ・グジャラート工場の開所式及び、カルナタカ州（トヨタ）、グジャラート州（スズキ）、ラジャスタン州（ダイキン）およびタミルナドゥ州（ヤマハモーター）の４つの州に於ける日本式ものづくり学校(ＪＩＭ)４校の開所式、高速鉄道計画において技術移転を促進させるべく川崎重工とインドＢＨＥＬ社との協力促進、スズキ、東芝、デンソー３社合弁によるインド初のリチウムイオン電池工場開設支援など 共同声明に異例とも言える企業名が多く盛り込まれたのも、今回の具体性の表れと言えるでしょう。
日印協会としては、今回の首相訪印後、その準備の采配をとりフルに同行された外務省 滝崎茂樹南部アジア部長による講演会を、その直後の１０月５日に主催し、多くの会員にご参加いただきました。また、同じく準備にあたり同行された外務省 有吉孝史南西アジア課長(現日米安全保障条約課長)には、協会機関誌「月刊インド」10月号に寄稿いただき、同行者ならではの貴重な情報をいただきました。
モディ政権は就任から４年目を迎え、依然強いリーダーシップが発揮されています。過去１０年来議論されてきた、初の国家統一税制ＧＳＴ（物品サービス税）の導入に、昨年７月踏み切りました。その前に行われた土地収用法の１２０年振りの改正とともに、ここに画期的な二大規制改革が行われたことで、外国企業、とりわけ日本企業にとっても、ビジネス投資環境がますます整いつつあります。
以上のような日印の政治経済面の発展のみならず、日印協会としては民間の立場で、文化面なども含む全方位に亘る関わりを引き続き維持しております。
その活動も、日印関係の深まりにともない年々多彩になり、日印協会としての後援事業が多種にわたってきております。詳細は活動報告にて記述いたします。
また学術研究においては、協会内に２０１５年９月発足の「現代インド研究センター(平林博センター長)」の活動を通して、より幅の広い研究テーマが設定されており、「現代インド・フォーラム」の形で発刊・発信しています。成果報告として今期も、「現代インド・フォーラム」２０１７年春季号Ｎｏ．３３　特集：「インドの宗教と社会」、同２０１７年夏季号Ｎｏ．３４　「特集：３年間のモディ政権を総括する」、２０１７年秋季号Ｎｏ．３５「インドをめぐる連結性（コネクティビティー）」、２０１７年冬季号Ｎｏ．３６「インド経済の最新動向」の刊行を予定通り行いました。
なお任期途中で副会長兼理事１名の交代がありました。また事務局長交代などの人事が承認されました。
本件は、理事会第１号議案（審議事項）として提案するもので、２０１７年度通期（４月―３月）の活動に関し、定款第28条第３項の定めにより、次の各項について業務報告といたします。

第 1 号議案は、事業報告書（案）ならびに事業活動記録（案）に基づいて、平林 博議長より説明し諮ったところ、出席理事全会一致により原案通り承認されました。
第 2 号議案：2017 年度決算報告（案）の承認の件につきましては、笹田勝義常務理事より、『貸借対照表』『正味財産増減計画書（予算対比付）』『財務諸表に対する注記』『付属明細書』『財産目録』『正味財産増減計算書内訳書』に基づいて説明し諮ったところ、出席理事の全会一致により原案通り承認されました。

収支状況について以下に若干触れておきます。
収入（経常収益）は28,731,825円となり、対して事業費（経常費用）は29,966,899円で、収支差額は123万円の赤字となりました。
主たる収入である受取り会費は、対前年7.5万円減の24,772,000円でした。他方支出（経常費用）では、直接事業費が昨年より120万円ほど増加ですが、これは昨年12月にホームページを全面改訂し、スマホ対応も取り入れるなどに要した費用に相当します。
当協会が行う事業は、定款で公益事業のみを行うこととし、収益事業は行いません。　結果として収入は企業会員や個人会員の会費収入で賄っています。これもひとえに会員各位のご協力とご指導の結果と厚くお礼申し上げます。

会員状況につきましては、以下の通りです。
1. 法人会員：
協会の活動と財政基盤を支える法人会員の数は、2018年3月末現在123社（特別法人会員46社、一般法人会員77社、この一年で出入りがありましたが、最終的に2016年度末と同数）です。インド新規進出

企業数は、2017 年 10 月時点で前年比 64 社増の 1,369 社（在インド日本大使館、JETRO 調べ）ではあるものの、報道の都度仕掛けても、入会にはなかなか至らないという現状が続いています。
法人会員候補企業には、社会貢献活動の一環として協会活動を支えていただくことが必要であるとのご理解と、法人会員であることの実利的なメリットをさらに訴求していくことが重要と考え、事務局としてでき得ることを案出してまいります。

2. 個人会員：

2018 年 3 月末現在、昨年度末より 15 減の 407 人です。2015 年度に実施した会費値上げの影響は終息したとみておりますが、高齢の会員の退会が依然目立ちます。この流れは公益財団法人、公益社団法人に共通する現象で、食い止めることが困難な状況が続くと思われます。しかしながら、12 月に新装なったホームページに入会を促す工夫を凝らしましたが、その効果が見え始めてきています。　あくまで目標は 500 人を掲げて引き続き努力したいと思います。同時に、次代を担う学生会員の拡大に注力したいと考えております。

Ⅱ．評議員会

2018 年 6 月 22 日（金）15:00－16:00 に六本木の国際文化会館に於いて、8 名の評議員のうち、5 名のご出席のもと開催されました。

評議員会の議案

第 1 号議案：評議員会議長の選任に関する件（決議事項）
第 2 号議案：議事録署名人の選任に関する件（決議事項）
第 3 号議案:『2017 年度事業報告書』の承認に関する件（決議事項）
第 4 号議案：『2017 年度決算報告』の承認に関する件（決議事項）
第 5 号議案：『2018 年評議員、理事、監事改選』に関する件（決議事項）
第 6 号議案：会員状況の報告の件（報告事項）
第 7 号議案：その他

出席評議員の互選で、松田純一評議員が議長に、また議事録署名人には、松田評議員、ペマ・ギャルポ評議員および小島 眞評議員が選任され議事が進められました。
第 5 号議案の評議員・理事の改選について、今回以下の評議員・理事の入れ替わりがありました。

退任評議員；佐川雄一氏
新任評議員；林 康夫氏　及び　大島賢三氏
退任理事；岡 素之氏　及び　福井弘之氏
新任理事；大森一夫氏　及び　松田 進氏

今回ご退任の評議員・理事の方におかれましては、長年日印協会を支えていただきました。
衷心より御礼申し上げます。

公益財団法人 日印協会 役員等名簿

（副会長は就任順、他の氏名は50音順）　　2018年7月現在

代表理事・会長	森　喜朗	第85代･第86代内閣総理大臣	
代表理事・理事長	※ 平林　博	元駐印･駐仏大使	
評議員	大島賢三	元国連大使 元駐豪大使 元国連事務次長	元JICA副理事長
評議員	小島　眞	拓殖大学名誉教授	
評議員	渋澤　健	シブサワ アンド カンパニー代表取締役	
評議員	谷野作太郎	(公財)日中友好会館顧問	元駐印･駐中大使
評議員	ペマ・ギャルポ	拓殖大学教授	
評議員	林　康夫	JETRO顧問	元中企庁長官、元JETRO理事長
評議員	堀本武功	国際政治学者	元京都大学特任教授
評議員	松田純一	松田綜合法律事務所所長	弁護士
評議員	松本　洋	(一財)日本国際協力システム顧問	元国際文化会館理事
理事・副会長	鈴木　修	スズキ株式会社代表取締役会長	
理事・副会長	大森一夫	住友商事株式会社相談役	
理事・副会長	小島順彦	三菱商事株式会社相談役	
理事・副会長	野路國夫	株式会社小松製作所取締役会長	
理事・副会長	松田　進	トヨタ自動車株式会社常務役員	
理事・副会長	鈴木　慎	三井物産株式会社代表取締役副社長	
理事	大内晴美	大内晴美税理士事務所所長	税理士
理事	小島秀樹	小島国際法律事務所代表パートナー	弁護士
理事	近藤正規	国際基督教大学上級准教授	
業務執行理事・常務理事	※ 笹田勝義	元日印協会事務局長	元インド三菱電機社長
理事	竹中千春	立教大学法学部教授	
理事	原　佑二	前日印協会業務執行理事・常務理事	元インド三菱商事社長
理事	半田晴久	世界芸術文化振興協会会長	
理事	比良竜虎	株式会社シンリョー相談役	
理事	増田泰三	有限会社シタァール代表取締役	
理事	山田真美	日印芸術研究所言語センター長	
監事	江田　仁	帝京平成大学教授	元三菱重工インド代表
監事	高梨恒弘	高梨恒弘税理士事務所所長	税理士
顧問	榎　泰邦	榎インド総合研究所代表	元駐印大使
顧問	岡本純一	三菱ケミカル株式会社取締役専務執行役員	
顧問	勝田友治	元日印協会理事	元㈱竹中工務店
顧問	齋木昭隆	三菱商事株式会社取締役	元外務事務次官、元駐印大使
顧問	田原総一朗	田原総一朗事務所代表	ジャーナリスト
顧問	堂道秀明	前JICA副理事長	元駐印大使
顧問	長崎暢子	龍谷大学 現代インド研究センター	東京大学名誉教授
顧問	中野良子	(公財)オイスカ・インターナショナル総裁	
顧問	前田専學	東京大学名誉教授	
顧問	横尾英博	株式会社デンソー常務役員	

（注）※は常勤、他は非常勤

公益財団法人 日印協会　法 人 会 員

（五十音順 2018年6月現在）

特別法人会員 46社	伊藤忠商事株式会社	株式会社東芝
	インドステイト銀行 東京支店	有限責任監査法人トーマツ
	ウェブスタッフ株式会社	トヨタ自動車株式会社
	株式会社ＮＴＴドコモ	株式会社豊田自動織機
	キヤノン株式会社	豊田通商株式会社
	国際縄文学協会	株式会社東横インホテル企画開発
	国際スポーツ振興協会	ＤＯＷＡサーモテック株式会社
	小島国際法律事務所	日本航空株式会社
	Corporate Catalyst India Pvt.Ltd.	株式会社日本視聴覚社
	株式会社小松製作所	株式会社菱法律経済政治研究所
	株式会社ジャパンペガサスツアー	東日本旅客鉄道株式会社
	新日鐵住金株式会社	株式会社日立製作所
	株式会社シンリョー	フィデル･テクノロジーズ株式会社
	スズキ株式会社	松田綜合法律事務所
	住友商事株式会社	丸紅株式会社
	世界開発協力機構	株式会社ミスズ
	世界芸術文化振興協会	三井農林株式会社
	全日本空輸株式会社	三井物産株式会社
	双日株式会社	三菱商事株式会社
	一般財団法人東京芸術財団	三菱ケミカル株式会社
	第一三共株式会社	武蔵野メディカル株式会社
	有限会社ダイメックス	株式会社ライズ・ジャパン
	株式会社大和証券グループ本社	ランプの宿株式会社
一般法人会員 79社	株式会社ＩＰパートナーズ	東京センチュリー株式会社
	あずさ監査法人	東洋アルミニウム株式会社
	株式会社 Willings	東洋インキSCホールディングス株式会社
	エア･インディア リミテッド	東レ株式会社
	株式会社エイチ･ティー･エル	株式会社中村屋
	一般財団法人 ＭＲＡハウス	日産自動車株式会社
	株式会社オカムラ	特定非営利活動法人日印国際産業振興協会
	沖印友好協会	日印ビジネス支援協会 株式会社
	鹿島建設株式会社	株式会社ニフコ
	鴻池運輸株式会社	公益財団法人日本交通公社
	株式会社コックス･アンド･キングス･ジャパン	一般財団法人 日本国際協力センター
	SUNWELL SOLUTIONS JAPAN	日本通運株式会社
	山九株式会社	日本電気株式会社
	ＪＦＥスチール株式会社	日本放送協会
	株式会社ジェイグリーン	野村ホールディングス株式会社
	株式会社ジェイティービー	ハイカル ジャパン
	株式会社システムコンサルタント	パナソニック株式会社
	株式会社資生堂	株式会社博報堂
	有限会社シタァール	バンク･オブ･インディア 東京支店
	株式会社商船三井	阪和興業株式会社
	品川イーストクリニック	株式会社ピーアイ・ジャパン
	株式会社島津製作所	日立造船株式会社
	スタンダードチャータード銀行	株式会社 弘中会グループ
	住友重機械工業株式会社	株式会社日吉
	住友電気工業株式会社	富士通株式会社
	セコム医療システム株式会社	国立大学法人北陸先端科学技術大学院大学
	ZEUS Law	前田建設工業株式会社
	ソフトバンクグループ株式会社	三井住友海上火災保険株式会社
	損害保険ジャパン日本興亜株式会社	株式会社三井住友銀行
	第百ゼネラル株式会社	株式会社三菱ＵＦＪ銀行
	大和ハウス工業株式会社	三菱重工業株式会社
	高砂熱学工業株式会社	株式会社みずほ銀行
	ダイキン工業株式会社	株式会社ヤクルト本社
	帝人株式会社	株式会社安井建築設計事務所
	ティー・ディー・パワーシステムズ・リミテッド	ヤスマ株式会社
	ＴＭＩ総合法律事務所	ヤマハ発動機株式会社
	株式会社デリー	ユーピーエルジャパン株式会社
	株式会社デンソー	学校法人立命館
	株式会社電通	ＹＫＫ株式会社
	東京海上日動火災保険株式会社	

2. 日印協会「機関誌」と協会の歴史—前編—

The Journals of Japan-India Association and its Brief History

日印協会　参与　　宮原 豊

1. はじめに —機関誌バックナンバーのデジタル化と日印協会の略史—

「日印協会」は20世紀初頭の明治36年（1903年）12月に発足し、本年平成30年（2018年）に創立115周年の節目を迎えました。

明治42年（1909年）8月に機関誌「日印協會々報」第1号を発行以来、明治、大正、昭和、平成を通じて、長い時代の変遷を超えてインドの政治・経済・社会の発展や日印交流、それを背景とした協会の活動が「機関誌」に記録されてきました。しかしながら「日印協會々報」は、昭和19年（1944年）11月に第88号を最後に中断されました。他方、昭和2年（1927年）～同12年（1937年）まで、日印協会によってカルカッタ（現コルカタ）に設置された日本商品館では、情報誌「印度甲谷陀日本商品館 館報」を112回にわたって発行しております。この2つの機関誌は質・量とも充実しており、明治時代後半から戦前のインド事情や日印協会の活動を詳しく知ることができます。

かねてから南アジア史研究を進めていた東京外国語大学が当時の文部省に申請した「日印関係史」をテーマとする研究が、21世紀COE「史資料ハブ地域文化研究拠点事業」（2002年～2007年）として採択され、同大大学院教授・藤井毅リーダーの下で、戦前の機関誌「日印協會々報」と「印度甲谷陀日本商品館 館報」の2誌が整備され、マイクロフィルム化されました。この資料は、その後にデジタル化されました。

戦後は、連合国軍占領下で日印協会の活動は経済交流に制限されましたので、名称を「日印経済協会」とあらため、昭和24年（1949年）12月～同27年（1952年）の間、「日印経済協會會報」が発行されました。昭和27年に日印経済協会の名称は「日印協會」に戻され、以来、「日印協會會報」、「印度」、「印度情報」、「インドニュース」と名前を変えながら機関誌の発行が続きました。昭和46年（1971年）7月からは機関誌「月刊インド」と改称され、現在まで47年間にわたって継続して発行されています。

日印両国は、国際環境の荒波に揉まれながらも、常に友好関係を維持して現在に至ったと言えます。日印協会も、山あり谷ありの時を刻みつつ、現在の親密な日印関係構築に大きな役割を果たしてきました。21世紀になって、両国は互いに「世界の主要国である」、また「世界で最も重要な二国間関係である」との認識の下にあらゆる分野で両国関係は大きく発展し、ますます緊密な関係を維持しております。2000年には、インドの核実験にともなう経済制裁の後遺症を修復するために訪印した、森 喜朗総理大臣（当時、現在の日印協会会長）と平林 博駐インド特命全権大使（当時、現在の日印協会理事長）により、インドのバジパイ政権との間で21世紀の新たな関係として、「日印グローバル・パートナーシップ」が樹立されました。その後この関係は、「戦略的グローバル・パートナーシップ」、次いで「特別戦略的グローバル・パートナーシップ」に順次格上げされ、三つの形容詞のついた世界でもまれにみる緊密な関係を築き上げました。

日印協会の機関誌は、右に示す「日印協會々報」第1号を発行して以来、名前を変えながらも連綿と発行し続けられてきましたので、これら「機関誌」を紐解くことによって、115年間の時空を超えた“知的冒険旅行”を楽しむことが出来ます。

機関紙は、事務所移転等のために戦後発行された機関誌の一部の巻・号が欠落し、全体像が把握できないままになっていましたので、今まで通読・検索することが出来ませんでした。この度、現状で可能な限りの史資料をデジタル情報化いたしましたので、それぞれの機関誌の時代背景や特徴を前編・後編に分けてご紹介いたします。本資料は、日印協会関係者のみならず、インドや日印関係の歴史を研究する方々にとって好個の資料になると考えます。

2. 「日印協會々報」第１号発刊の頃

まず日印協会を語るうえで、故三角佐一郎氏（1917 年～2018 年）を忘れることはできません。三角氏は昭和 13 年（1938 年）～平成 19 年（2007 年）まで 69 年もの長期間にわたって日印協会の運営に直接関わり、役員退任後も日印交流行事には頻繁に顔を見せておられました。今年 1 月 26 日に都内で開催されたインド大使館主催の共和国記念日式典に出席されましたが、2 月 23 日に満 101 歳で永眠されました（「月刊インド」2018 年 4 月号に訃報）。

日印協會々報　第一號

論說

經濟的日英同盟

會員　伯爵　大隈重信

三角氏は、前述の東京外国語大学研究プロジェクトの総仕上げとしてまとめられた研究叢書「回想の日印関係（日印協会元専務理事・三角佐一郎氏の対談集）」（日印協会所蔵）の中で、自分が親しく接した日印協会発足時のことを知る人物として、丹野清氏と副島八十六氏の 2 人を紹介しています。

日印協会は、時あたかも日露戦争（1904~05 年）へと向かっていく直前（1903 年）に、長岡護美子爵を会頭として、外相や首相を歴任した大隈重信侯爵や日本の資本主義を確立した渋澤栄一子爵をはじめとする著名な方々により設立されました。その中で、日印協会の前身「日印倶楽部」の首唱者であった丹野清氏は、「広いインドで、あれだけ優秀で膨大な民族を、イギリスが押さえ込んでいるのはけしからん」と、心底からインド独立を応援していました。一方、協会創立時から日印協会運営に関わっていた大隈重信侯の秘書・副島八十六氏は、日英同盟下の日本においてインドとの友好通商関係を推進した日印協会の微妙な立場について語っていたそうです。また、実質的に日印協会運営に最も深く関与していた渋澤栄一氏は、のちに「日本資本主義の父」と称される日本財界の重鎮となりますが、インドへの関心が高かったのです。渋澤栄一氏は、日印協会発足以前の 1889 年には、時の外務大臣・大隈重信侯に相談し、外務省のお墨付きを得てインド調査団を派遣しています。

前述の「日印協會々報」第１号には、大隈重信侯による「経済的日英同盟」および渋澤栄一氏による「印度綿花輸入及び孟買（ボンベー）航路の起源」と題した論評が掲載されました。両氏が抱いていたインドの重要性に関する透徹した先見の明を示すもので、大きな歴史的価値があります。

三角氏は「日印協会は国家間の関係ではなく、むしろ（一貫して）民間の関係を念頭に置いてきた」と言っています。1947 年に独立するまで、インドは英国の植民地（British Raj）でしたから、当時のインドと日本との関係は、国と国との関係ではありませんでした。三角氏の指摘は当を得ています。しかしながら、2 代目会頭となった大隈重信侯は、当時の国益を考えると、ロシアへの対抗上も「日英同盟」を強固にせざるを得ないとの立場から、前述の論評「経済的日英同盟」において、「東西文明の調和者たる日本が東洋勃興のために、世界平和のためになさねばならぬ仕事である」として、インドを支配していたイギリスとの同盟という政治的枠組みの中で日印関係を盛り立てていく必要性を論じています。かなり抑制の効いた文章ですが、これがヨーロッパで問題になり、それに対して大隈会頭は第 3 号で「論説：日印協会に対する欧米の誤解に就いて」を著し、「決してインド人を扇動するものではない」と弁明しています。日印協会は英国大使サー・クロード・マクドナルドを顧問に置くなど（7 号まで役員名簿に顧問として掲載）の配慮をしていたものの、「イギリス側は（日印協会が）インド独立運動を扇動しているのではないかと常に疑っていた」とも言われています。

3. 機関誌は経済および文化関係促進の観点から編集

「日印協會々報」を通読すると、全体に最も多くのページが割かれているのは経済・産業・通商関係、次いで人的交流と文化交流だと言えます。

記事を見ると、第 1 号「印度綿花輸入及びボンベー航路起源（渋澤栄一）」、「印度に於ける欧州列国の商品販売方法（吉田壽信・農商務省嘱託）」以下、第 3 号「カルカッタ日本商品陳列会報告」、第 4 号「印度視察団を組織すべき」、「日印間郵便為替条約のこと」、第 14 号「印度航路の沿革」など、民間ビジネスに関わる具体的な情

報や提言が多いのでした。第 5 号「日本在留の印度学生について」（報告）は人的交流を扱ったものですが、その後も毎回（例えば第 25 号を見れば）、【本会の斡旋事項】として、①通商貿易、②印度留学生（紹介・就職斡旋）、③海外渡航（紹介）の情報を掲載し、ビジネス情報、人材や人の往来の情報を提供・斡旋をしていたことが窺えます。

大正 11 年（1923 年）に日英同盟は破棄され、日印関係は厳しい環境におかれるようになりましたが、協会の機関誌は日印間の通商問題をメイン・テーマとして取り上げています。大正 15 年（1926 年）第 38 号「カルカッタ市に日本商品館開設について」、昭和 8 年（1933 年）第 53 号「日印通商条約廃棄と我が対策」、昭和 9 年（1934 年）第 56 号「日印会商と日印貿易の将来」、昭和 12 年（1937 年）第 63 号「インドにおける日本品ボイコット」、「第 2 次日印会商に就いて」、昭和 13 年（1938 年）第 65 号「（支那）事変下における日印貿易の検討」、対米英開戦後の昭和 17 年（1942 年）の第 80 号には「貿易より見た印緬関係」や「ベンガル州の産業と貿易」が掲載されています。

明治 44 年（1911 年）～昭和 2 年（1927 年）の間は、半年毎に和文・英文を交互に発行しています。第 5 号（明治 44 年）から第 41 号（昭和 2 年）です。内容的には、必ずしも和文が先でそれを英文翻訳すると言うことではなく、時には英文の内容が先に掲載され、その和文が次号に掲載される場合もあります。「日印協會々報」は年に 2～3 回、体裁は A5 版の上下 2 段組み、分量的には毎号 140 ページの充実したもので、多くは会員の中から各分野の専門家に投稿・寄稿してもらっていたようです。

文化交流関係では、アジア人初のノーベル賞受賞者タゴールのことは、受賞直後の大正 3 年（1914 年）第 8 号に「印度大詩人ラビンドラナート・タゴール」として紹介され、大正 6 年の初の訪日時には協会としての歓迎振りが詳しく報告されました。その後も何度か訪日されるたびにタゴールの話題が掲載され、昭和 16 年（1941 年）の第 77 号の「タゴール追悼の辞（野口米次郎）」まで 10 回以上取り上げられています。

＜初訪日のタゴール翁を迎える人々（誌面より）＞

日印協会が支援した文化交流事業の中では、80 年前の野生司香雪画伯によるサルナートの初転法輪寺壁画揮毫のこと（（第 52 号、55 号、59 号、60 号）、あるいはその翌年の立教大学のヒマラヤの霊峰ナンダコート登頂（第 60 号、63 号、64 号）などは、連載記事として詳しく紹介されています。

4. 第 3 代渋澤栄一会頭の時代：インド独立運動にも関与

大隈重信侯は大正 11 年（1922 年）1 月 10 日に逝去され、渋澤栄一子爵が第 3 代の会頭に就任しました。

渋澤会頭は、同年 9 月第 32 号（英文）に「故大隈会頭の思い出（A Tribute to the Memory of the Late Marquis Okuma）」、同年 10 月第 33 号に「大隈侯を弔す」、約 1 年後の大正 12 年（1923 年）9 月第 34 号（英文）に「渋澤会頭の挨拶」を掲載しています。ところが、第 34 号を発行した同じ月の 9 月 1 日に関東大震災が発生し、次の第 35 号は 2 年後の大正 14 年（1925 年）12 月に発行され、トップ記事は「震災後の日印協会」でした。第 36 号（大正 15 年）も震災後の事情が綴られています。

その数年前に遡ると、大正 9 年（1920 年）第 29 号で大隈会頭は、「日英同盟の継続と印度」を記し、「旧式外交の時代は去れり」としつつも「日英同盟の必要性」を論じ、「その継続を望む」としています。ところが、これを良しとしないアメリカの謀略で、ワシントン条約交渉（1921 年 11 月～22 年 2 月）の結果、大正 12 年（1923 年）に 20 年続いた日英同盟は破棄されます。大隈会頭が死去した翌年に関東大震災が発生、日印協会だけでなく日本中が大混乱に陥っていたことは想像に難くありません。しかし、東京・横浜を中心とした関東一円が壊滅的被害を受けながら、震災 2 年後に日印會報第 35 号が発行されたのは驚異的なことと言えます。

日印協会の活動は経済・通商関係を中心に活発化し、機関誌の内容も経済関係のものが重視されていますが、一方で、日英同盟が失効したことにより、インド独立運動を紹介する記事が多くなってきました。

大正 14 年（1925 年）第 35 号には「ガンディの紡車演説」、昭和 2 年（1927 年）第 40 号「聖者としてのガンディ」、続いて第 44 号「マハトマ・ガンヂ―」、昭和 5 年（1930 年）第 47 号「印度国民運動の情勢」、同年第 48 号「聖雄ガンヂ―の叫びに目覚めつつある印度の現状」、昭和 6 年（1931 年）第 50 号「第 2 次円卓会議とガンディの渡英」、昭和 7 年（1932 年）第 51 号「ガンディーと印度の往く途」が掲載されています。さらに、インドで活動していた藤井日達師は、昭和 10 年（1935 年）第 58 号～60 号に「ガンヂ―翁との会見（沙門・行勝）」を 3 回に分けて寄稿し、第 61 号「ガンヂ―翁に与ふるの書」、昭和 12 年（1937 年）第 62 号「甲谷陀日本寺創立について（藤井行勝）」を掲載しています。

昭和 12 年（1937 年）第 63 号には、後に歴史上重要な意味を持つインド独立運動の闘士スバス・チャンドラ・ボースの論文「極東に於ける日本の地位」が掲載されます。昭和 16 年（1941 年）5 月第 75 号には、「日本の蹶起に期待す（エ・エム・サハイ）」、「大東亜共栄圏と印度」というプロパガンダ的な論述が掲載されました。昭和 18 年以降は、第 83 号に「チャンドラ・ボース氏の略傳」、昭和 19 年（1944 年）第 86 号「印度の独立と大東亜の大義」とともに、「印度独立を宣明して日本国民諸君に訴ふ（チャンドラ・ボース）」、「ボース首班、大東亜会議に出席」、「仮政府の対英米宣戦布告」、そして昭和 19 年（1944 年）11 月第 88 号「印度進撃の決意を語る（スパス・ボースの演説）」と続きます。その間、「ネルー自傳」は昭和 15 年（1940 年）第 71 号から昭和 18 年（1943 年）第 84 号まで 14 回連載されました。

「甲谷陀日本商品館 館報」について触れておきます。

第 3 代渋澤会頭の関係方面への働き掛けにより政府の補助金を得て、日印協会はカルカッタに甲谷陀日本商品館を運営することになりました。この館報は昭和 2 年（1927 年）12 月第 1 号～昭和 12 年（1937 年）5 月第 112 号まで、約 10 年間毎月欠かさず発行されています。「英領印度の輸出入状況（月次）」が毎号掲載され、インドの経済・通商・産業のことが詳細に報告されており、商品館活動（日本の出展企業や商品）とともにインド側の対日輸出引き合い情報が掲載されています。特筆すべきは、昭和 3 年（1928 年）3 月の第 3 号「冬期列車バザールを終りて（高岡大輔）」です。商品館立ち上げ後早々の昭和 2 年（1927 年）11 月 30 日～12 月 30 日の 1 ヶ月に、日本企業の様々な商品を積んでインド 22 か所を列車で訪ねる「巡回見本市」が開催されました。この「館報」には政治的なものはあまり掲載されていませんが、「ガンディー」が連載で 11 回、「ガンヂー自叙傳」が 12 回連載されています。

なお、昭和 6 年（1931 年）11 月 11 日に渋澤会頭が他界され、大隈信常侯爵が第 4 代会頭に就任しました。同年 12 月日印協會々報第 50 号に「會頭渋澤子爵の薨去」、翌年 6 月の第 51 号に大隈会頭の就任について報じられています。また、昭和 14 年（1939 年）には、日印協会は外務省の認可を受けて財団法人となりました。

（後編・次号に続く）

◇ 事務局からのお願い ◇

個人会員の皆様には、4 月 1 日付で、「個人会員年会費納入のお願い」をお送りしております。皆様には、引き続きのご支援を賜りたく、まだ手続きがお済でない方はお早目の納入をお願い申し上げます。

退会ご希望の場合は、「退会希望」と明記の上、住所、氏名、退会理由をE-mailまたはFAXで協会事務局宛にお届けください。

お問合せは、本誌23頁、掲示板の最下段をご参照下さい。

日印協会「機関誌」一覧

1）日印協會々報（1～88）明治 42 年（1909）8 月～昭和 19 年（1944）11 月
2）印度甲谷陀日本商品館 館報（1～112）昭和 2 年（1927）12 月～12 年（1937）8 月
3）日印経済協會會報（1～21）昭和 24 年（1949）12 月～27 年（1952）7 月
4）日印協會會報・戦後（1～7）昭和 27 年（1952）12 月～29 年（1954）2 月
5）印度（3 巻～8 巻、計 11 回）昭和 29 年（1954）5 月～35 年（1960）1 月
（＊欠番：第 4 巻、第 6 巻 1 号、第 7 巻 2～3 号。4）が第 1 巻、第 2 巻に当る。）
6）印度情報（1 巻～3 巻、計 7 回）昭和 37 年（1962）6 月～39 年（1964）9 月
（＊印度情報（特集）を昭和 41 年 10 月 25 日発刊の記録があるが、実物不明。）
7）インドニュース（7 巻～12 巻、計 54 回）昭和 41 年（1966）6 月～46 年（1971）4 月
（＊7）の前に刊行されたインドニュース 1～6 巻は実物不明。）
8）月刊インド（35 年間、計 365 回）昭和 46 年（1971）7 月～平成 19 年（2007）6 月
9）月刊インド：事務所で内作（11 年、計 110 回）平成 19 年（2007）7 月～現在進行中
（＊平成 19 年 7 月以降は全て最初からデジタル化されている。）
10）月刊インド（創立 100 周年記念特集号）
11）日印関係の回顧と展望（110 周年記念特集）
12）現代インド・フォーラム（2009 年 4 月第 1 号～2018 年 4 月第 37 号）

（注）上記に一覧した日印協会「機関誌」は、日印協会会員であれば事務所内にて検索可能となりました。将来はアーカイブ化し HP 上に全資料をアップする予定です。

3. 日印友好 所縁の地 栃木県宇都宮市とさくら市
—印度独立の志士 丹野清と、タゴール心の友 荒井寛方—

History Explorations for Japan-India Friendship in Utsunomiya and Sakura, Tochigi Pref.

日印協会 主務 玉岡 善美

日本でインドと所縁の深い地域として有名なのは、やはり港町・横浜や神戸であろう。横浜とインドとの関係のはじまりは 1863 年まで遡る。横浜が開港した 4 年後に、インドにとって初めての海外の経済拠点が横浜に置かれた。以来、経済的・文化的な親交を深め、1965 年にはムンバイと姉妹都市を締結している。毎年行われる「ディワリ・イン・ヨコハマ」の来場者数は 20 万人を超え、その関係は一層深まりを見せている。しかし、関東には横浜市の他に、密かにインドと深い関係のある場所がある。それは、栃木県宇都宮市と、隣接するさくら市である。この両市に所縁のある人物はインド独立支援活動家の丹野清と、明治から昭和にかけて活躍した日本画家の荒井寛方である。

＜印度独立の志士 丹野清＞

丹野清は、1875 年（明治 8 年）に仙台藩士の家に生まれた。病弱な幼少期を過ごし、本の虫であった。

維新が過ぎ、明治の新たな時代の風が吹きすさぶ中、旧仙台藩は時代に流されるままであった。これに憤りを覚えていた若者の中に丹野の存在があった。新たな時代に何ができるか自問し、世の中の新しい動きや外国の事情にも積極的であった丹野は、16 歳の頃から東洋史に興味を持つ。特に、インド史の多様性と特異性と中国や日本との共通点に触れると、その魅力に取り付かれ文明史の研究を深めた。しかし、仙台という片田舎ではインド関連の情報を入手する手段が限られるため、丹野は仲間を集めて勉強会を開き、新しい価値を創り出すことを目

的に「インド研究会」を立ち上げる。この頃丹野 27 歳、アジアのかつての大国インドの現状を憂い、密かに心の内で活動家を志した。

1902 年（明治 35 年）に日英同盟が締結され、時はあたかも日露戦争に突入せんとする頃、丹野は東京で講演をする機会も得る。この上京中に丹野は、中央公論主筆 桜井義肇、当時チベット探索で有名になった本願寺僧侶で、インド在住 9 年の後に帰国した川上貞信に出会い、インド独立支援活動家としての立場を固めた。この時に、日印間の友好を深めるため、丹野、桜井、川上、インドで仏教復興を目指していたダルマパーラらにより「日印倶楽部」が結成されたが、これが翌年 1903 年（明治 36 年）の日印協会設立に繋がっている。

1911 年（明治 44 年）、丹野は最初の著書「印度観」を出版。各界の有権者に配布し、厳しい現状を踏まえつつもインド解放を訴えた。大正期に入ると、犬養毅、頭山満、大川周明などと交流を深める傍ら、インド独立の志士や在日インド人留学生を、私財をなげうって支援した。丹野が最も支援した在日インド独立運動家の一人が、日本に亡命していたラース・ビハリ・ボースであった。当時、英国と同盟関係にあった日本は、英国からのボース引き渡しの要請を受けるが、頭山満らが図りボースをかくまい、丹野をボースに引き合わせた。革命家としてのボースの人柄に惹かれた丹野はボースの帰化後、全国での講演活動を支援する。

昭和になり、インドの貧困問題を深く知るようになった丹野は、日本の自由主義的刹那的風潮を心苦しく見ていた。父から受け継いだ「士魂」と「大いなる本懐」を持つ丹野には、この風潮が日本社会に蔓延していくのが耐えがたかった。また丹野は、軍部主導の大義なき大陸政策に憤慨し、持ち前の歯に衣を着せぬ意見で、警察に出頭させられることが茶飯事であった。1937 年（昭和 12 年）7 月、日中戦争が開戦した頃のこと、日印親睦の場づくりを行う目的で、ボースは「印度公友会」を新宿中村屋で開催するようになる。4 年間で計 10 回開催され、丹野も講演している。日中開戦直後から「印度独立連盟」が結成、「青年亜細亜会議」の活動が活発化するにつれ、丹野の講演の機会が増え、頭山満と行動を共にすることも増えた。丹野は、平沼内閣時（1939 年 1 月 5 日－8 月 30 日）に「米国との同盟・協同をし、アジアを平和的に収め、インドを独立させるべきである」旨を進言し、以後、警察の監察下に置かれ、丹野は沈黙を余儀なくされる。

丹野は、昭和 20 年代に執筆活動を再開し、『印度独立は二十世紀の偉績なり』『アジア政府建設論』『アジアの公敵は誰か』『世界平和論』など、多数残している。第 2 次世界大戦後の 1947 年（昭和 22 年）8 月 15 日に、インドは独立を果たす。この頃丹野は 73 歳となっていた。頭山満などの活動家とは違い華やかな表舞台に立つ性格ではなかったが、インド独立を支援し続けた丹野を、訪日したネルー首相は「インド独立十周年記念」のレセプション・パーティーに招待し、握手を交わし感謝の意を述べた。時は流れ、1998 年（平成 10 年）3 月、丹野の孫にあたる稔は、駐日インド大使館からインド独立 50 周年記念式典へ招待を受け、その時に、ナラヤン大統領から感謝状が贈られた。そこには「（中略）インドは、（丹野清）翁のお陰で日印の友好、理解、協力の基盤作りが為され、付け加えられたことを忘れない。」と記されていた。

＜写真上：常念寺の「印度独立」碑、
下：蒲生神社の「丹野清翁之碑」＞

＜丹野清の功績を巡る旅―宇都宮市―＞

世界の平和を願い、インド独立を支援し続けた丹野清は、「二度と愚かなことが繰り返されないように」との願いを込め、「印度独立」碑を建てた。それは、丹野の終の棲家となった宇都宮市にある常念寺で大切に守られている。

この他にも、宇都宮市には丹野の功績を称えるものがある。丹野と生前縁のあった蒲生神社には、「丹野清翁之碑」が有志の手により建立

された。そこには、「(中略) 翁は名利を事とせず辺幅を飾らず、常に人類平和共存の大道を説き、数々の遺訓を残して昭和三十七年米寿の年没す。ここに翁の偉業を讃え、世に伝えんとするなり。」と記されている。さらに、碑文の上部には、当時の駐日インド大使 ラジル・メロトラの英文の辞が刻まれている。

<タゴール 心の友　荒井寛方>

荒井寛方は 1878 年（明治 11 年)、現在の栃木県さくら市氏家の提灯などに文字や家紋を印字する稼業を営む家に生まれる。寛方は幼少期に、目の病で画家になる夢をあきらめた父のために自分が画家になることを決意した。日印協会発足の一年前に当たる 1902 年（明治 35 年)、寛方 24 歳の時に、美術雑誌社「国華社」に勤務し模写の仕事をする間、仏画に興味を持ちはじめる。1914 年（大正 3 年）寛方は、日本画の衰退を前に西洋画と日本画の折衷を試みた絵画研究団体「日本美術院」に参加し、横山大観、下村観山ら日本画の巨匠とともに作品を発表していった。

既に仏画を書くようになっていた寛方は、仏教誕生の地であるインドに憧れを抱いていた。1916（大正 5 年）にタゴールが来日すると、下村観山 作の能の演目を題材にした作品<弱法師(よろぼし)>を観るや感銘を受け、原寸大の複製を所望した。この複製の制作を請け負ったのが寛方であった。寛方は、タゴールが滞在していた三渓園で、1 カ月かけてこの作品を完成させた。この光景を間近で見ていたタゴールは、寛方にタゴールが設立したシャンティニケタンのタゴール国際大学で講師をして欲しいと嘆願した。寛方が制作した複製はシャンティニケタンへ渡り、その後ヴィシュヴァ・バーラティー大学へ納められた。当時、ベンガル・ルネサンスの中心的存在であったタゴールは、寛方の日本画の手法を見て、インドの古典美術をムガールの影響から解放できると考えていた。一方、寛方は仏画の刷新を目指し、インドへの関心を一層深めていた。

アジャンタの壁画模写をするためにインドへ向かう寛方は 1916 年 11 月、東京を立ち 12 月にカルカッタに到着。このインド滞在中、後に寛方の絵に大きな影響を与えることになる、当時のインド近代美術の先駆者であったナンダラル・ボースと、タゴールの甥のスレドロナト・タゴールらと親交を深める。1917 年 12 月にはカルカッタを立ち、壁画模写のためにアジャンタへ向かう。そこで寛方は、朝井観波を助手に模写に取り掛かるが、3カ月に及ぶ過酷な環境下での作業は、彼らを疲弊させた。この時、寛方と共に模写に挑んだのが桐谷洗鱗と、後にサールナートにある初転法輪寺の仏教壁画を描くことになる野生司香雪(Vol.114, No.7『月刊インド』9 月号）である。このアジャンタでの経験が、寛方晩年の大仕事、法隆寺金堂壁画の模写に繋がっていく。1918 年 5 月、寛方の帰国にあたりタゴールは、友情の証に詩を送った。この詩は、さくら市にあるタゴール平和記念公園に記念碑として、タゴール直筆のベンガル語と日本語訳で刻まれている。

<ナンダラル・ボース
(1882-1966) >

<ラビンドラナート・
タゴール (1861-1941) >

荒井寛方へ

愛する友よ　ある日　君は　客人のように私の部屋に来た
今日　君は　別れの時に　私の心の内奥に来た

ロビンドロナート・タゴール　(我妻和男 訳)

<タゴール平和記念公園の記念碑
右：ベンガル語、左：日本語訳>

インド滞在は寛方の作風を一変させた。仏画の図像にはアジャンタでの経験やボースの知識が生かされ、日本では前例のない色彩に富んだ仏画が生み出されていった。「仏画の寛方」と呼ばれた寛方の優れた作品には、インド文化が深く刻み込まれているといえる。

現在、荒井寛方の作品や関連資料の多くはさくら市ミュージアム 荒井寛方記念館、及び栃木県立美術館に所蔵されており、さくら市ミュージアムでは寛方の作品が常設されている。

さくら市ミュージアム　栃木県さくら市氏家 1297　 Tel:028-682-7123

開館時間：9:00～17:00（入館は 16:30 まで）

* 休館日：月曜日（祝日は開館）、第 3 火曜日、祝日の翌日（土曜日、日曜日を除く）年末年始、展示替えの期間等。http://www.city.tochigi-sakura.lg.jp/site/sakura-museum/

＜参考文献＞

山田義雄 『絆を彫る―栃木県に「インド独立の碑」を建てた丹野清翁の物語―』（2006）下野新聞社

稲賀繁美 『タゴール、ノンドラル・ボシュと荒井寛方―20 世紀前半におけるベンガルと日本の文化交流の一班』（2011）国際日本文化研究センター

4. 菩提僊那継承事業と大安寺
Bodhisena Memorials

公益社団法人 在日インド商工協会　　青山 鑛一　　個人会員

写真提供：NPO 法人日印交流を盛り上げる会 会長　　長谷川 時夫

1. 日本とインドとの関係

日本とインドとの関係は、近年、政府間・民間ともにかつてないほど極めて良好かつ発展的に推移していることは慶賀の至りである。特に、1998 年のインドによる核実験により一時冷え込んでいた両国関係は、2000 年に森　喜朗首相（当時。現在、公益財団法人日印協会会長）の訪印を契機として打ち上げられた「日印グローバル・パートナーシップ」とその後の「戦略的日印グローバル・パートナーシップ」のスローガンの下で、友好親善関係は政界・官界・財界・民間ともに飛躍的に改善し発展してきていることは、ご高承のとおりである。

ところで、現在のかくも良好な両国関係は、近年急速に醸成されたものであろうか。両国の友好親善関係がいかに築かれてきたのか過去に遡って思いを馳せるとき、日本史上初めて来日した、インド人婆羅門僧、菩提僊那（Rev. Bodhisena）の奈良東大寺大仏の開眼供養の導師として活躍した偉業に触れないわけにはいくまい。

西暦 752 年、孝謙天皇らが臨席されたこの供養には、文武百官、僧 1 万人が参列したといわれるから、その規模の壮大さは想像を絶する上、菩提僊那の導師としての役割の重要性はいかほどのもであったか想像に難くない。

2. 菩提僊那継承事業

インド政府は 2012 年、今を去る 1260 年以上前の菩提僊那の功績を現代の私たちに継承するという重要、かつ意義深い事業を「日印国交樹立 60 周年記念事業」の一環として開催した。以来この事業を継承しているのが、「NPO 法人日印交流を盛り上げる会」（代表 長谷川時夫）である。

本年 5 月 3 日（木）、『盛り上げる会』は継承事業としてインド政府派遣のオリッシー舞踊団『ソナリ・モハパトラ舞踊団』（オリッシーダンサー3 名、フルート 1 名、ヴォーカル 1 名、マーダル 1 名、ヴァイオリン 1 名。総勢 7 名）による公演を宮城県女川町を皮切りとして、インド大使館を含む日本全国 8 会場で開催した。（女川町での模様は 5 月 5 日付「石巻かほく」新聞に掲載された。）

3. ナマステ・インディア in 女川町

宮城県女川町は、2011 年 3 月 11 日発生した東日本大震災で甚大な被害を被った。

当日テレビで生々しい災害の模様が放映され、見入る人の驚きと大きな悲しみを誘ったことは記憶に新しい。インド政府は直ちにレスキュー隊員 46 名を同町に派遣して精力的に救援活動を行った。以来、同町とインド大使館との交流が今でも続いている。毎年 9 月、代々木公園で日本最大規模のインド祭“ナマステ・インディア”を主宰している『盛り上げる会』は、2016 年初めて「ナマステ・インディア in 女川町」を開催して以来、同町の復興支援に積極的に参画しており、本年 5 月その第 3 回目を迎えた。この機会に、復興支援を更に推進するため上記舞踊団の公演を挙行したわけである。

会場スペースには菩提僊那の坐像が安置され、多くの来場者が感慨深げに見入っていたのが印象的であった。

4. 大安寺に於ける最終公演

本舞踊団の最終公演を飾ったのが、5 月 13 日（日）奈良大安寺である。当日はあいにくのシトシトの雨模様で若干肌寒いほどであったが、近在の方々はもとより全国から駆け付けた大勢のインドファンで会場は満席となり、大急ぎで補助いすを運び出す中、会場はむせ返るほどの熱気につつまれていた。

菩提僊那はこのありさまをどのような感慨を持って観ていらっしゃったのであろうか、とふと頭をよぎったのはひとり筆者のみであろうか。

大安寺は、菩提僊那が今から 1260 年以上前に僧籍を置き、かつ逗留していた日本仏教史上極めて由緒ある特筆される高野山真言宗の寺院である。
南都七大寺の一つに数えられ、奈良時代から平安時代前半までは東大寺、興福寺と並ぶ大寺であった。現境内の南に残る塔跡に昔日の威容を忍ぶことができる。

＜点灯式、写真左から長谷川時夫日印交流を盛り上げる会会長、T. アムストロング チャングサン 在大阪・神戸インド総領事、河野裕韶 大安寺 副住職、増田修司 奈良県知事代理・知事公室 国際課長＞

5. 団長ソハリ・モハパトラ女史

ここで、団長のソハリ・モハパトラ女史とその一行について若干触れなければならない。彼女は 4 歳のころからオリッシーダンスを習い始めたが、不幸にも 5 歳の時に医療ミスにより聴覚の大部分を失うという不幸に見舞われた。本人の血の滲むような努力と良き指導者に恵まれて、多くの困難を克服して現在では世界的なオリッシーダンサーとして活躍する一方、後進の指導に精力的に取り組んでいる。彼女のダンスは、その技術面は勿論、全身を駆使する比類のない表現の豊かさが高く評価されている。
彼女の公演は 1992 年に始まり、本年 5 月の来日公演までの 26 年間に、日本公演（2012 年）を含む国内外で 60 公演以上に及ぶ。

なお、夫君 Abhiram Nanda 氏（フルート奏者）も、今回の来日公演に参加した。

沖守弘氏、データベース写真館【沖守弘 インド写真】

長年当協会会員として日印交流に尽くされた写真家・沖守弘氏は、去る 4 月 9 日に満 88 歳で永眠されました。ご冥福をお祈りします。

沖守弘氏は 1977 年から 1996 年の 20 年間にわたり、インドやネパールの各地を巡り写真に収め続けた写真家である。同氏は、1929 年（昭和 4 年）に京都で生まれ、1950 年代から 70 年代にかけ、日本の社会的テーマを題材に報道写真家として活躍した。1974 年、45 歳の時に人口問題に興味を持った沖氏はインド、コルカタへ向かう。難民が押し寄せスラム化した当時のコルカタのあまりの惨状を前に、「報道写真」を撮ることができなかったという。そんな時出会ったのが、沖氏が生涯慕い続けることになるマザー・テレサであった。彼女を日本に初めて紹介したのもまた、同氏であった。

当時インドは、ヒッピー文化に代表される「神秘の国」であり、また、「貧困と差別の国」というイメージを負っていた。マ

＜ケララ州トリチュールでおこなわれる巨象のパレード。
シバ神を祀ったヴァンダクムナタン寺院の前の広場で、4･5 月に行われる。
『沖 守弘写真集「インド･祭り」』学習研究社出版企画室、1988 年、に収録＞

ザー・テレサを追う傍らで、そんなインドに別の光を当てたのが沖氏であった。ジープで地球一周半分にも及ぶ約 7 万キロの走行距離を走り、インド各地の芸能、壮大な祭礼、美しい民族画や工芸と、人びとのエネルギーが集中する「ダイナミック・モーメント」（沖氏の言葉）をとらえてまわった。そんな写真の中には、激しい社会変化の中で消滅した各地の芸能や民家、農耕技術を収めた歴史的資料として貴重なものも多く含まれている。

そんな沖氏の 2 万点にも及ぶマザー・テレサ関連以外の写真が、データベース【沖守弘 インド写真】で閲覧することができる（以下、データベースの HP アドレス）。

http://htq.minpaku.ac.jp/databases/moindia/japanese/index.html

同ホームページでは国立民族学博物館に寄贈された全ての写真を、地域やキーワードで検索することが可能。

（文責：日印協会　主務　　玉岡 善美）

5. インドニュース（2018 年 6 月）
News from India

1. 内政

【野党連合に向けた動き】

6 月 1 日　　カルナタカ州において連立州政権を樹立したコングレス党とジャナタ・ダル世俗派は、次期下院総選挙で選挙前協力を行うことを決定した。

【ジャイトリー財務相の退院】

6 月 4 日　　休職中だったジャイトリー財務相は、腎臓移植手術を終え、全インド医科大学を退院した。同財務相は医療関係者に感謝するツイートをした。

【州知事会議】

6 月 4 日－5 日　　デリーで州知事会議が開催された。コヴィンド大統領は開会のスピーチの中で、各知事に対し、発展の利益をあまり受けることのできていない人々の生活の改善のための道筋作りへの支援を要請した。また、モディ首相は、連邦政府による旗艦政策がより多くの人々に裨益できるよう各州知事に支援を求め、初めて電化された村々を訪問するよう要請した。

（注：州知事 Governor は大統領が各州に任命する官選知事で、プロトコール上は大統領を代表するものとして各州選挙で選出される州首相 Chief Minister の上位にある。）

【バジパイ元首相の入院】

6 月 11 日　　長期に亘り自宅療養中のバジパイ元首相（元インド人民党総 BIP 総裁）が、「定期的な検査のため」全インド医科大学に入院した。モディ首相、シャーBJP 総裁、ラーフル・ガンディー・コングレス党総裁等が見舞いに訪れた。12 日、同大学は、同元首相の容態は安定していると発表。

【カルナタカ州での選挙】

6 月 13 日　　カルナタカ州議会補欠選挙がジャヤナガル選挙区で実施され、ジャナタ・ダル世俗派の支援を受けたコングレス党候補者が BJP 候補を僅差で破り勝利した。

【モンスーン国会】

6 月 25 日　　インド議会省は、モンスーン国会の日程（7 月 18 日－8 月 10 日）を発表した。

2. 経済

【インド準備銀行による金融政策委員会会合】

6 月 6 日　　インド準備銀行（RBI）は、金融政策委員会会合を開催し、その結果を公表した。RBI による政策金利の引き上げは、2014 年 1 月以来（7．75%→8．0%）の約 4 年ぶりであり、またモディ政権下では初めての利上げとなる。インドでは 2015 年 1 月以降、断続的な利下げが行われる利下げサイクルに入っていた。なお政策金利の水準の変更は、2017 年 8 月（6．25%→6．0%）以来。

MPC ステートメントのポイントは以下のとおり。

（1）政策金利（レポ・レート）を 6．0%から 6．25%へ引上げ。

(2) 金融政策に対する中立的（neutral）なスタンスを維持。
(3) インフレ率の見通し：2018 年度のインフレ見通しは、年度前半は 4．8～4．9%、年度後半は 4．7%を見込む（注：前回時点の見通しは、年度前半が 4．7～5．1%、年度後半が 4．4%）。
(4) 2018 年度の実質 GDP 成長率見通しは 7．4%。

【国際収支等の発表】

6 月 13 日　RBI が、2017 度（通年）の国際収支を発表した。

(1) 経常収支
2017 年度の経常収支赤字は対 GDP 比 1．9%となり、貿易赤字の増加を背景に、前年度の同 0．6%から拡大した。
(2) 貿易収支
2017 年度の貿易赤字は▲1,600 億ドルとなり、前年度の▲1,124 億ドルから拡大した。
(3) 海外直接投資
2017 年度の海外直接投資（純流入額）は 303 億ドルとなり、前年度の 356 億ドルから減少した。
(4) 外貨準備高
2017 年度の外貨準備高は 436 億ドルの増加となり、前年度の増加分（216 億ドル）を上回った。

3. 外交

【インド・シンガポール関係】

5 月 31 日－6 月 2 日　リー・シェンロン シンガポール（以下星）首相からの招待を受け、モディ首相はシンガポールを公式訪問し、ハリマ・ヤコブ星大統領を表敬、リー・シェンロン星首相、ゴー・チョクトン前星首相と会談したほか、印星共同声明の発出及び覚書の署名等がなされた。また、訪星中、モディ首相は、シャングリラ・ダイアローグで基調演説を行い、そのサイドラインでマティス米国防長官と会談したほか、ビジネス兼コミュニティ・イベントで演説を行った。

【インド・南アフリカ関係】

6 月 3 日－7 日　スワラージ外相は、BRICS 外相会議出席のために南アフリカを訪問し、ラマポーザ南ア大統領を表敬したほか、BRICS 外相会議に出席した。

【インド・中国関係】

6 月 9 日－10 日　モディ首相は上海協力機構（SCO）首脳会合出席のため訪中した。SCO 首脳会合のサイドラインで、モディ首相は習近平国家主席と会談した後、中印二国間で合意文書の署名がなされたほか、同サイドラインでモディ首相は、ミルジヨーエフ・ウズベキスタン大統領、ラフモン・タジキスタン大統領、ナザルバエフ・カザフスタン大統領、ジェエンベコフ・キルギス大統領と会談した。

【インド・ギリシャ関係】

6 月 16 日－19 日　パヴロプロス・ギリシャ大統領からの招待を受け、コヴィンド大統領はギリシャを公式訪問し、パヴロプロス大統領と会談、チプラス首相からの表敬を受けた。また、コヴィンド大統領は、印ギリシャ・ビジネスフォーラムで演説を行ったほか、インド人コミュニティに対して演説を行った。

【インド・フランス関係】

6 月 18 日－19 日　スワラージ外相はフランスを訪問し、マクロン仏大統領を表敬したほか、ル・ドリアン欧州・外務大臣と会談した。また、スワラージ外相はインド人コミュニティに対して演説を行った。

【インド・ベルギー関係】

6 月 20 日－22 日　スワラージ外相はベルギーを訪問し、ユンカー欧州委員会委員長及びタヤーニ欧州議会議長を表敬したほか、モゲリーニ EU 外交・安全保障上級代表兼欧州委員会副委員長及びレンデルス・ベルギー副首相兼外務大臣と会談した。

4. 日印関係

【日米豪印協議】

6 月 7 日　シンガポールにおいて、日米豪印協議が実施された。同協議において、四か国は、全ての国が主権・

国際法、航行・上空飛行の自由、持続可能な開発を尊重する、自由で開かれ、包摂的なインド太平洋地域に対する共通の支持を再確認した。四か国は、共有する民主的価値を念頭に置き、インド太平洋におけるルールに基づく秩序を維持・強化するという共通のコミットメントを確認し、開発・連結性、良い統治（グッドガバナンス）、テロ対策や不拡散を含む地域の安全保障、海洋協力等における共通の目標を達成するための方法を議論した。四か国は、インド太平洋地域における ASEAN の中心性を支持し、また、同地域において、東アジア首脳会議（EAS）や ASEAN 地域フォーラム（ARF）などの ASEAN 主導の枠組みが不可欠な役割を果たしていることを改めて確認した。また、四か国が、インド太平洋地域における開放的で透明性があり包摂的かつルールに基づく秩序の擁護・強化において、それぞれ重要な役割を担っていることに留意した。四か国は、インド太平洋地域を平和で繁栄したものとするとの共有されたビジョンを推進するため、地域の国・機関と協力すること及び同協議を定期的に開催することで一致した。

今月の注目点：第 5 回日印次官級 2+2 対話

6 月 19 日、インド・デリーにおいて、第 5 回日印次官級 2+2 対話が開催された。この対話には、日本側から森健良外務審議官及び真部朗防衛審議官が、インド側からはビジャイ・ゴーカレ外務次官及びサンジャイ・ミトラ国防次官が出席した。この対話では、現下の国際情勢の下、地域やグローバルな諸課題の対応にあたり、日・インド間の連携が一層不可欠となっているとの基本認識を共有するとともに、我が国の「自由で開かれたインド・太平洋戦略」とインドの「アクト・イースト」政策を連携させ、自由で開かれた海洋、地域の安定と繁栄という共通目標の実現に共に取り組むことで一致した。さらに、昨年 9 月の日印首脳会談において 2+2 対話等を通じて安全保障・防衛分野の協力に関する対話を強化することを再確認したことを踏まえ、海洋安保協力、防衛装備協力等の分野における協力強化のあり方について議論した。そのほか北朝鮮情勢を含む東アジア、南アジア情勢等の地域情勢についても意見交換し、認識を共有した。

6. イベント紹介
Japan-India Events

=◇　最近のイベント　◇=

◆　「印度の魂　日本の心　真夏の宵の競演」上演！

7 月 3 日（火）、国立小劇場にて日本舞踊×インド古典舞踊の夢の共演、「印度の魂　日本の心　真夏の宵の競演」が上演されました。この公演は、日本舞踊界を背負う西川箕乃助、花柳寿楽、花柳基、藤間蘭黄、山村友五郎により結成された五耀会が主催し、5 人の日本舞踊家とインド古典舞踊家サンギータ・チャタルジー女史、インド古典音楽とのコラボレーションを実現したものです。この舞台は、国際交流基金協力 2017 年にインド・デリーにて行われた、日本舞踊の演目「羽衣」と「三番叟」、「ラーマーヤナ」をインド古典楽器伴奏のもとカタックと共演したものをベースとしています。今公演では、日本舞踊の演目「新曲浦島」「羽衣」「三番叟」と、日印共同制作舞踊劇「ラーマーヤナ」を上演しました。1 曲目の「新曲浦島」は、日本舞踊のみで構成され、雄大な海の情景とともに漁村の風景が表情豊かに描かれ、ダイナミックな動きと美しい波の表現が優雅で力強い素晴らしい作品でした。2 曲目の「羽衣」は、美しいシタールとタブラの伴奏で、日本舞踊家花柳氏とカタック舞踊家が贈る演劇性のある舞踊でした。日本舞踊の微細なしぐさや間で感情を表現するのと、インド古典舞踊のダイナミックな感情表現が違和感なく融合し、最後に天女がお礼の踊りとしてカタックダンスを披露する場面も、美しいフィナーレとして観客の心をつかみました。3 曲目の「三番叟」は、西川氏、花柳氏、山村氏の 3 名とタブラ演奏家の共演で、インド古典音楽と日本舞踊がいかに融合し得るのか、大変先進的な試みでした。五穀豊穣を寿くといわれる踊りで、力強い足拍子が特徴の演目ですが、タブラのリズミカルで力強い演奏と完全な調和を果たし、更なる躍動感を与える、掛け算式の素晴らしい化学反応を見ることができました。さて、最後の演目「ラーマーヤナ」ですが、日本人にはあまり馴染みのない物語ですが、本公演には全くセリフがありませんでした。しかし、役者の見事な演技力、言語を超える表現力と構成力で観客を惹きつけ、最後まで息を飲む公演を堪能することができました。日本舞踊とインド古典舞踊・音楽とのコラボレーションの日本公演は、拍手喝さいのもと幕を閉じました。

（本文：日印協会　主務　　玉岡 善美）

＝◇　今後のイベント　◇＝

◆　第 29 回インド家庭用品展、第 39 回インド衣料品展、第 1 回インドシルクフェア開催のご案内

毎年恒例のインド家庭用品展･インド衣料品展が、開催されます。
この展示会は、日印間のテキスタイル、衣料品、ホームファッション製品の貿易を推進･拡大を目的に 20 年以上にわたり毎年開催され続けています。
この度は、第 1 回インドシルクフェアも同時開催になっております。
主催のインド貿易振興局は、デリーに本部を構える商工省管轄の政府機関です。
インド国内外の地域の経済団体･貿易振興組織･商工会議所･産業及び輸出入業団体･マスメディア･政府機関とのさまざまなネットワークを構築しながら、インド製品･テクノロジー･サービス業務の促進、ならびにインド市場機会･インド企業に関する情報を国外に情報提供をする目的とし設立されました。
インド市場にご興味のある企業の方は、是非ご参加下さい。

日　時：2018 年 7 月 18 日(水)～20 日(金)
　　9:30～17:30 *初日のみ 10:30～
会　場：マイドームおおさか 3F
　　大阪府大阪市中央区本町橋 2-5
入　場：無料(業界関係者または招待状持参の方)
　　※招待状ご希望の方は、
　　日印国際産業振興協会サイトの入場券応募フォームをご利用下さい。
主　催：インド貿易振興機構(インド デリー本局)、日印協会後援
お問合せ先：特定非営利活動法人　日印国際産業振興協会(日本窓口)
　　TEL: 03-5733-5068　FAX: 03-5733-5047　mail: info@npo-jiipa.org

◆　『英国総督　最後の家』8 月 11 日（土）から
新宿武蔵野館ほか全国順次ロードショー！

**―1947 年、イギリスからの独立前夜、混迷を深める激動のインドで
歴史に翻弄された人々を鮮やかに描いた感動の人間ドラマ**

二つの国が生まれる時―英国領インド最後の６か月、真実の物語

イギリスからの主権譲渡のため、新総督任命されたマウントバッテン卿、その妻と娘は、インド・デリーの壮麗なる総督の屋敷にやって来る。そこでは独立後に統一インドを望む国民会議派と、分離してパキスタンを建国したいムスリム連盟によって、連日連夜論議が闘わされた。一方、新総督のもとで働くインド人青年ジートと令嬢の秘書アーリア、互いに惹かれあう 2 人だが、信仰が違う上に、アーリアには幼いときに決められた婚約者がいた…。

監督・脚本：グリンダ・チャーダ（『ベッカムに恋して』）
出演：ヒュー・ボネヴィル、ジリアン・アンダーソン、マニーシュ・ダヤール、フマー・クレイシー、マイケル・ガンボン
2017 年/イギリス/カラー(一部モノクロ)/2.39：1/106 分/5.1ch/英語、パンジーャビー語、ヒンディー語/日本語字幕:チオキ真理/
原題：Viceroy's House/配給：キノフィルムズ/木下グループ　公式サイト：eikokusotoku.jp
© PATHE PRODUCTIONS LIMITED, RELIANCE BIG ENTERTAINMENT(US) INC., BRITISH BROADCASTING CORPORATION, THE BRITISH FILM INSTITUTE AND BEND IT FILMS LIMITED, 2016

◆　『おしゃべりなインド舞踊―ケララに夢中―』出版記念公演　開催のご案内

インド南西の端に位置する緑と水の豊かな“地上の楽園”南インド・ケララ州へようこそ！
ケララにて古典舞踊、モヒニアッタムを学んだモヒニアッタム舞踊家、丸橋広美さんがこの度、20 年間の修行の体験談を一冊の本にまとめました！『おしゃべりなインド舞踊―ケララに夢中―』出版記念として、公演が開催されます。
南インド、ケララ州に伝わる舞踊、モヒニ「この上もなく魅力的な」アッタム「踊り」を堪能できる講演、是非お運びください！
＊日印協会会員様は、500 円割引となっております。お申込みの際に、「日印協会会員」である旨をお知らせください。

日　時：2018 年 9 月 8 日（土）開場　18:00　開演 18:30
場　所：座・高円寺 2　　東京都杉並区高円寺北 2-1-12
全席指定：前売+本　5,000 円、前売 4,000 円、当日 4,500 円、学生 3,000 円
予約、お問い合わせ：ケララ企画　TEL&FAX 042-574-8217、Email keralakikaku@gmail.com、mohini@nifty.com
主催：ケララ企画、後援：公益財団法人　日印協会

◆　ナマステ・インディア 2018 開催のお知らせと、日印協会の講演会のご案内

9 月 29 日（土）、30 日（日）に、代々木公園イベント広場にてナマステ・インディア 2018 が開催されます。それに合わせ、29 日に 1 回、30 日に 1 回の計 2 回、エア・インディア セミナーハウスに於て、講演会を開催致します。皆様、お誘い合わせの上奮ってご参加下さい。

9 月 29 日（土）
　13:00～14:00
　定評の面白可笑しくてためになる講演！
　講師：山田　真美
（作家/博士 人文科学、日印協会理事、インド工科大学ハイデラバード校　教養学部客員准教授）
9 月 30 日（日）
　13:00～14:00
　「インドワインの楽しみ方（仮）」
　講師：森下 篤司（日本ソムリエ協会認定ワインエキスパート）

7. 新刊書紹介
Books Review

§『現代インド・フォーラム』2018 年夏季号 No. 38

日印協会会員に 7 月 2 日にメール配信致しました。
協会 HP には 7 月 9 日にアップ致しました。次の URL にてご覧いただけます。
https://www.japan-india.com/forum

今号では、“インド太平洋”を特集しました。

1. インド太平洋海域の含意とその将来―インドの視点―
   アビジート・シン
   （オブザーバー研究財団（ニューデリー）上席研究員・海洋政策研究部門長）
2. 日米豪印 4 カ国枠組みの現状と今後
   ―「安全保障のダイヤモンド」構想はどこまで実現したか―
   長尾 賢（ハドソン研究所 ビジティング・フェロー）
3. インド太平洋時代の日印関係
   ティトリー・バス（防衛研究分析研究所（ニューデリー）研究員）

§『印度頓智百譚（インドとんちひゃくものがたり）』 書店流通版、POD 版（プリントオンデマンド版）

著者：ラース・ビハリ・ボース、渋沢青花
出版社：まちごとパブリッシング
価格：本体 3,650 円＋税　ISBN978-4-86143-332-0

これは、インド独立のもう一人の志士「中村屋のボース」ことラース・ビハリ・ボース、児童文学作家である渋沢青花による共著で 1931 年（昭和 6 年）に発行されたものを復刻したものである。「テナリラーマ物語」「マリアダ・ラーマン物語」「ラジャ・ビルバル物語」「コマチのとんち物語」「馬鹿婿さんの話その他」「新インド民話」「ラヤとアパジの物語」「テルグの民話」の 8 つのチャプターに分けられ、114 の小さなとんち物語が繰り広げられます。チャプターにはそれぞれ説明文がつけられ、物語の背景が理解しやすくなっています。ビハリ・ボースは本書の制作に当たり、「私はただ一意国を憂うるの士として、政治以外他を顧みる暇を持たなかったものであるが、この頃日印相互の理解のためには、その国情なり、過去の文化なりを紹介することのもっとも大切なのを痛感するに至った」と記しています。初版発刊の当時も日本の読者はこのとんちに笑いころげながら、遠い印度という国に思いを馳せながら日本との共通点を感じ取っていたのではないでしょうか。

（文責：日印協会　主務　玉岡 善美）

◇ 事務局夏季休業のお知らせ ◇

日印協会事務局では、8 月 13 日（月）より 17 日（金）までを、夏季休業とさせて頂きます。
お問合せ・ご連絡等は、休業期間を避けられます様、お願い申し上げます。

8. 掲示板
Notice

〈次回の『月刊インド』の発送日〉

次回発送は、2018年9月21日(金)を予定しております。催事チラシの封入をお考えの方は、日程をご確認のうえ事務局までご連絡下さい。チラシを封入する際には、当該催事の協会会員に対する割引等特典の配慮をお願いしております。チラシ印刷の前にご一考下さい。

<編集後記>

<インドのゴミ山>

マハラシュトラ州で6月23日より、正式にプラスチック禁止令が施行されました。この禁止令はマハラシュトラ州全土で適用され、使用が禁止されます。違反者は罰金または禁錮刑の対象になります（罰金はRs 5,000、Rs 10,000、Rs 25,000）。他州から持ち込んだり、破棄する行為も処罰の対象となりますので、マハラシュトラ州へ旅行で訪れる際は、電車やバスでマハラシュトラ州の駅に入る場合にも気を付ける必要があります。禁止の対象となるものは、ビニール袋、使い捨てのプラスチック製品（スプーン、フォーク、コップなど）ポリスチレン製品（皿、グラス、ボウル、容器など）や、ラップなど。禁止の対象とならないものは500mlのペットボトル、薬などのパッケージ、食品グレードのビニール袋など。施行から25日までの3日間で、プネー市自治体は42の違反商店から総額21万ルピーを徴収したと発表しました。自治体の良い収入源となるとともに、少しでもインドのごみ事情の改善とゴミ山の縮小に貢献することを心から願います。ところで、日本は過剰包装で有名（？）ですが、リサイクルシステムが徹底されています。善良で真面目な日本市民のおかげもあり、分別が徹底され、然るべきリサイクルが為されています。しかし、海外ではこうはいきません。環境問題に敏感なドイツにおいても、分別の種類を増やすと誰も分別してくれなくなるのが現状のようです。そこで、環境大国ドイツの首都ベルリンに、商品パッケージが皆無のスーパーができました。販売されるものは食品が主で、すべての商品は客が持ち込んだ耐久性のある容器に詰めてくれます。「オーガニック食品をよりリーズナブルに」とのコンセプトでオープンしたこのスーパーに、注目が集まっています。

禁止令に関連する情報は、「マハーラーシュトラ州汚染奉仕委員会」にてご覧いただけます。mpcb.gov.in/plastic/plastic.php

（玉岡 善美）

本誌に掲載致します投稿等は、執筆者のご見解・ご意見であり、
当協会の見解を反映するものではありませんので、念のため申し添えます。

入会随時受付中

日印協会は、1903年、長岡護美、大隈重信、澁澤榮一の３名が中心となって創設されました。以来、日印の相互理解の促進を目的として、両国の友好親善に関する事業を行ってきました。

現在の協会の活動は、当協会の活動に賛同下さる会員の皆様からの会費によって支えられております。今後もより良い活動を続けるために、当協会の活動にご賛同いただける法人・個人のご入会を歓迎致します。

インドに関心をお持ちのお知り合いの方がいらっしゃいましたら、是非日印協会をアピールして下さい。ご希望により、当協会の活動に関する諸資料をお送りいたします。日印協会の活動に賛同して頂ける多くの法人会員・個人会員のご入会をお待ちしております。

☆年会費	個人	１口(8,000円)から	☆入会金	個人 2,000円
	学生	１口(4,000円)から		学生 1,000円
	一般法人会員	１口(100,000円)から		法人 5,000円
	特別法人会員	１口(150,000円)から		(一般法人、特別法人会員共に)

月刊インド Vol.115 No.6 (2018年7月13日発行) 発行者 平林 博 編集者 西本 達生
発行所 公益財団法人 日印協会
〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町2-1-14 スズコービル2階
Tel: 03-5640-7604 Fax: 03-5640-1576 E-mail: partner@japan-india.com
ホームページ: https://www.japan-india.com/